

# 香芝地名考 — 狐井

タウンウォッチャー 松浦利國(狐井)

人に名前が付いています様に、土地にも地名があります。それも古い土地柄程、語彙が豊富であります。

わが香芝市も古い土地ですので、それになぞらわしい呼称があると考えられます。例えば「狐井」と書いて「きつねみず」かと？と訊ねると、この地域に住む人、縁故ある人以外は、首を傾げます。恐らく香芝市の地名では難しい方に属すると思えます。

昔は、文字通りの表現にて「キツネ」と呼んでいたともいわれ、俗に「キツネ」とか、訛って「ケツネ」の首を耳にしたこともあります。そして、いつの頃からか、現代の呼称の「キツイ」と、使われるようになってきました。

その狐井にどの時代から人が棲む様になったのでしょうか。

歴史を遡ると、狐井城山古墳(宇中山)の東部一帯(改正池付近)に縄文遺跡が発見されていますが、邑人が集落を形成する場合、必然的に良好な水汲場が求められます。その源泉が井戸であることは勿論ですが、そういう事柄からすれば、狐井の東部に位置する五位堂は、大和志料所収の「元禄郷帳」に「五井戸」とも書かれていることは偶然でしょうか。或は、「二上山」からの伏流水脈が走っているのかも知れません。

地理的には、「二上山」頂に立って、東の奈良盆地を俯瞰するとき、眼下に狐井城

山古墳が臨まれます。☆淡路島—二上山—三輪山—室生山—見ヶ浦を結ぶほぼ一直線上にあり、太陽のラインとも呼べます。

昭和三十年、下田村史を編纂するに当たり、奈良眞の学者、史家が狐井古墳(当時の呼称)を訪れた折の所見は「近世に於いて城砦として利用されていたため可成りの変化はあるが、前方後円墳の容を非常によく留めており、被葬者は墳墓に使われていた割抜き式長持形石棺と冢形石棺の蓋石が発見されていることから、大王級或は有力豪族と推定できる」と。遥かなる古代に想いを馳せてみますとき、

天皇、大王、有力豪族級の墳墓となります。一説には、武烈天皇、茅渟皇子、葦田宿禰の三候補の名が上がりませんが、果たして……。過ぐる年、畝傍御陵の陵墓監をされ、県の代表監査委員で俳人であった、故亀井教孝氏を案内したとき、狐井の東側から二上山を望んで左の城山、右の堂山(通称)は、左帝陵、右妃陵と述べられたことを憶い出しました。

そして、いつか読んだ本に、この辺りは、常磐の里、貴堂長の丘と呼ばれていたとか。この丘陵の真中に、狐井の氏神杵築神社が祀られています。杵築(キツキ)とは、和名抄、出雲国出雲神社に杵築郷を収む。風土記に「杵築郷……八束水臣津野命の国引き給ふの後、天下を造くらし、大



狐井城山古墳と堂山を望む

神の宮に仕えまつらんとて、諸の皇神等宮処に参集して杵築き給ふ。故に寸付と云ひ、神龜三年に字を杵築と改む」と見ゆる地にして、実に杵築大社即ち出雲大社の鎮座地なり……と。推うに古代の狐井は杵築、出雲との脈絡があったのではないかと霞んでみえます。そこ云えば、古代角力の元祖(野見宿禰と当麻蹶速)が争った土俵が、良福寺の小字名に残る腰折田であろうと連想され……。興味津々、不思議の物語であります。

記録的には、狐井赤土家文書に「狐井の里に名井あり、狐の井と言ふ、吾舗の内在りて、水は甚だ清らかなり、此由緒を取りて此里を狐井村と云ふ」とあります。そして中世、「二上山城主岡周防守の女を母系としその支城狐井里に拠つた故に、城山と伝わりと聞きます。

結局、狐井の地名は古代にはじまり、杵築神社の祭神は(素戔嗚尊)で、杵築井(キツキイ→キツイ)となりますが、民俗学的には狐が棲んで居た洞窟が陥没、底から清水が湧出したと伝承されています。

なお、氏神さまの境内には立派な井筒石の共同井戸が在り、水道が施される迄は村人の汲場として賑わった情景が臉に浮かびます。

正しく、命の水の井でありました。

杵築井の清水を汲みて年迎ふ、其國